報　告

あん摩スキル向上に向けた評価表の工夫

－生徒が作成した評価表の活用－

前田智洋
筑波大学附属視覚特別支援学校

キーワード　あん摩、評価、練習

Ⅰ　はじめに

我が国では、企業における従業員の健康管理を目的としたヘルスキーパー、老人介護における健康管理・リハビリテーション、個人が経営する治療院など、幅広い場所であん摩が医療的に用いられている。医療的なあん摩は病態把握に基づいた治療を行うために、診察や医療面接の結果から、治療部位や方法を決定する。治療部位が特定できたとしても、的確に目標とする組織に対するアプローチができること、そして患者に対して心地よい感覚を与えることができなければ良い治療に繋がらない。特にあん摩では、力のかけ方、手の動かし方など、さまざまな要素の技術が一体となって、心地よい刺激と的確な治療が可能となる。

日頃の授業においては、あん摩の技術１つ１つについて、生徒には重要な点について説明をしながら練習している。また、定期的に教員が生徒の施術を受け、不十分な部分を生徒にフィードバックしている。さらに、テストを実施し、点数によっても評価をしている。生徒同士でも練習し、お互いにコメントをし合っているものの、明確な指摘をし合うことは難しい。しかし、全員が共通の評価ポイントを持ち、練習できれば効率的に技術の向上ができる。

生徒が意欲的にかつ、一つ一つの技術の詳細を意識して練習できる環境作りを目的に、良いあん摩とはどのようなあん摩か、生徒に自分の考えを出してもらい、その内容を評価表にまとめることとした。１年時には、基礎を確実に習得することが重要であるため、この取り組みは適切でないと思われるが、基礎を習得した後の学生に対しては効果的であると考えられる。

評価表を作成するまでのプロセスと、評価表の詳細について報告する。

Ⅱ　評価表作成の流れ

１．対象クラス

対象としたのは、本校研修科の生徒である。研修科とは、すでにあん摩の免許を取得し、さらに知識や技術向上を目的に設置しているクラスで、生徒の大半は教員を目指している。

２．評価表作成の実際

１）技術要素ごとの分析

以下の手技について、どのような視点が必要か、思いつく限り生徒に列挙してもらった。生徒が考えて出したポイントについて、少し改善した方が良いものには教員が補足的に指導を行い、誤った視点の評価にならない

よう留意した。

①軽擦
②把握
③揉捏
④圧迫
⑤叩打・曲手
⑥全体を通して

その結果、表１のような評価項目が完成した。

２）技術全体を評価するための整理

表１の評価表は、１つ１つの要素について、評価を行う項目が多い。要素ごとに、どの部分が優れていて、どの部分が不足しているかを詳細に評価することには使用できるが、あん摩全体を点数化することは難しい。また、評価ポイントが多すぎるため、あん摩を受けながら全ての項目について評価していくのは困難である。

そこで、表１の評価表の中から特に重要な評価要素を10項目ピックアップし、それぞれの項目に対して（１＝悪い　２＝問題ない　３＝良い）で点数を付け、全体として点数化できる形式とした。

この作業においては、教員側が特にあん摩で重要な評価項目を生徒に伝え、教員主導で行った。

その結果完成した評価表が表２となる。

Ⅲ　授業実践を通して

１．表１の活用

前述の通り、表１は、手技ごとに生徒が列挙した評価ポイントがまとめられたものである。この評価表は、軽擦、揉捏など一つの手技に限定した練習を行う際に使用すると効率的である。

例えば、生徒同士がペアを作り、軽擦の練習を行う場合、術者は軽擦を何度も繰り返して被術者に対して行う。その間、被術者は評価表の内容を順に確認しながら、それぞれの評価ポイントについて、できている点、できていない点を術者に伝える。それを聞いた術者は、できていないポイントに意識を向けながらさらに軽擦を繰り返し、できていない部分を克服していくことができる。

実際に上記の方法で練習を実施したところ、術者にとっては大変明確な評価がフィードバックされ、また被術者は相手の手技を評価することを通して、適切に手技を行うには何が大切かを意識することができたようだ。さらにそのことが自分の技術向上にも繋がって、術者になった際に自分が被術者の立場でコメントをした内容を意識しながらよりよい施術ができる。

２．表２の活用

表２は、肩背部、上肢など、各部位ごとに全体的な評価をしながら練習をする際に用いると効率的である。

授業の中で、部位ごとの練習を行う場合や、全身を通して練習を行う場合、被術者は術者に対して明確な評価を伝えることが難しい。施術を受けている時間の前半は集中できるが、後半には評価を術者に伝えることが難しい様子がみられる。しかし、評価表を持ちながら施術を受けると、表１の時と同様に、術者に対して的確なコメントを伝えることが可能になる。また、全体を通して点数を付けることができるため、術者が到達度を客観的に意識できる。手技を受けながら評価をしていくことには少し慣れが必要で、実際に評価表を用いて術者にコメントを伝えたり、点数を付けたりすることに苦労している生徒もいた。

ただ、お互いに点数を付けながら練習するのは新鮮な体験だったようで、授業の後もお互いに評価表を使いながら練習する様子もみられた。

表２のような、評価表は現在我々教員が生徒の技術を評価する際にも用いられている。ただし、これは日本で統一されたものがあるわけではなく、各学校・個人で重要ポイント

表１　あん摩評価表（詳細）

		配点
1　軽擦	①圧が一定か。	
	②密着度（身体のラインに沿って、軽すぎない）	
	③速度（雑にならない）	
	④方向（遠心性）	
	⑤始点・終点	
2　把握	①広く把握できているか（母指球や小指球を使って）	
	②漸増漸減	
	③的確に筋を把握できているか	
	④力の方向・角度は的確か	
	⑤左右の圧が同じか	
3　揉捏 ・輪状・線状 ・拇指・手根 ・四指・手掌	①始点・終点	
	②リズム	
	③漸増漸減	
	④手のあたり方	
	⑤部位による圧の調節	
	⑥垂直圧	
	⑦１点ごとの間隔が一定か	
	⑧筋を的確に捉えているか	
	⑨圧のかけ方（指だけになっていないか）	
	⑩揉捏の動きの大きさは適当か	
	⑪支え手（位置・圧など）	
4　圧迫	①漸増漸減	
	②垂直圧	
	③持続圧	
5　叩打・曲手	①強さ（重すぎず、軽すぎず）	
	②テンポ	
	③音	
	④部位	
6　全体	姿勢	
	患者への声掛け・配慮	
	全体的な流れ	
合計		

表２　あん摩評価表

1＝悪い　2＝問題ない　3＝良い

1　軽擦	圧・密着度・速度・範囲など	
2　把握	当たり・力度など	
3　揉捏	当たり・力度・動きなど	
	リズム・間隔・範囲など	
	支え手	
4　圧迫	漸増漸減・方向・力度など	
5　叩打・曲手	強さ・テンポ・音・部位など	
6　全体	姿勢	
	患者への声掛け・配慮	
	全体的な流れ	
合計		

を考慮して作成した評価項目を使用している。

Ⅳ．終わりに

実技の練習は、まず教員が生徒に対して技術を伝え、その後生徒同士もしくは教員に対して長い時間をかけて反復した練習を行う。生徒が教員に対して施術を行いながら練習している時には、直接さまざまな修正点を指摘してもらうことが可能である。しかし、教員以外の身体に対して施術をしながら練習をする場合、自身の良い点と悪い点が明確にならず効率的でないという生徒からの声があった。単に心地よいとか、痛いといったコメントではなく、どの手技のどんなところが不十分かをお互いに伝え合えるこの方策は大変有効であると思われる。

生徒が自らあん摩の重要ポイントに意識を向け、能動的に練習を行うために、良いあん摩を行うポイントを一度考えさせたことは有効であった。どのクラスに対してもこの取り組みは有効であろうと考える。すでに完成している評価表を生徒に与えて練習させるのも時間的な効率は良いかもしれないが、自分で一度考えるプロセスを加えることは大切である。

これまで述べてきたのは学校の授業における一例であるが、治療院などの現場でも新規採用者に対する指導など活かせる場面があるように感じる。その場合、各現場でどの部分を重要視しているのかを評価表の形で従業員に配布して、評価ポイントを意識させながら練習をしていくと効率的ではないかと思われる。

今後も生徒が能動的に練習できる方策について、さらに検討を重ねていきたい。